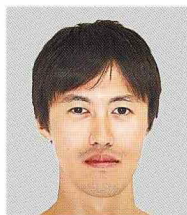


障害者導き東京パラへ

札幌出身のコックス立田

パラポート



立田寛之

札幌出身の立田は石狩翔陽高でボート部に入り、統率力を認められコックスに。進学した日大と、現在所属する埼玉県の社会人ク

ル。混合かじ付きフォアは、手足や視覚に障害がある男女4人がこぎ手で、2千円の直線コースで競う。後ろ向きで座るこぎ手が息を合わせてオールをこげるよう、掛け声を出すコックスは健常者も認められている。

掛け声でかじ取り

来夏に延期された東京パラリンピックを目指し、ボート種目「混合かじ付きフォア」の日本代表チームの一員として、障害者とともに練習に励む健常者の道産子アスリートがいる。ボートの全日本選手権や国体を制した経験がある立田寛之(28)は埼玉・戸田中央総合病院ローイングクラブ、石狩翔陽高出。障害者のこぎ手を率いるかじ取り役「コックス(舵手)」を務める。新型コロナウイルスの感染拡大でチーム練習はできない状況だが、「メンバーと励まし合って苦境を乗り越え、大舞台に立ちたい」と夢を追う。

(野口 汎)

ラブでは、全日本選手権や国体で日本一に輝いた。2017年には、こぎ手8人と乗る「男子エイト」の日本代表として、アジア選手権で銀メダルを獲得した。男子エイトで東京五輪出場を目指したが、日本ボート協会の重点強化種目から外れ、五輪予選への派遣が見送られた。

失意の中、パラチームがコックスを募集していると知った。パラのこぎ手は競技歴が浅い上、周囲の状況を把握しづらい視覚障害者もあり、コックスの重要性が高い。「パラへの挑戦が自分の成長につながると思った」と決断。18年秋の選考会を突破し、チームの一員となった。



練習ではコーチ役も務めるが、「何事にも前向きに挑戦するパラ選手の姿勢から学ぶことが多い」。競技活動の軸をパラに移し、昨春から、勤務する広告代理店を休職。貯金を切り崩して資金を捻出、東京パラリンピックを目指してきた。

ネットで合同練習

出場権獲得には、今月の世界最終予選で2位以内に入る必要があったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で予選自体が延期に。チームも活動停止になった。現在は週1回、インターネットのビデオ通話でこぎ手と結び、埼玉県の自宅で体幹を鍛える合同練習に励む。

将来は男子エイトで24年パリ五輪出場も見据える。ボートでパラと五輪の両方に出場した日本選手は例がなく「コロナを克服し、北海道などの若い競技者に夢を与えられる存在になりたい」と誓う。

▲昨年10月のアジア選手権で2位に入った混合かじ付きフォア日本代表。コックスの立田(右)がこぎ手を鼓舞する